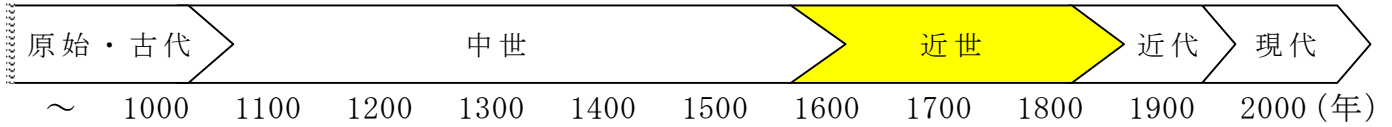
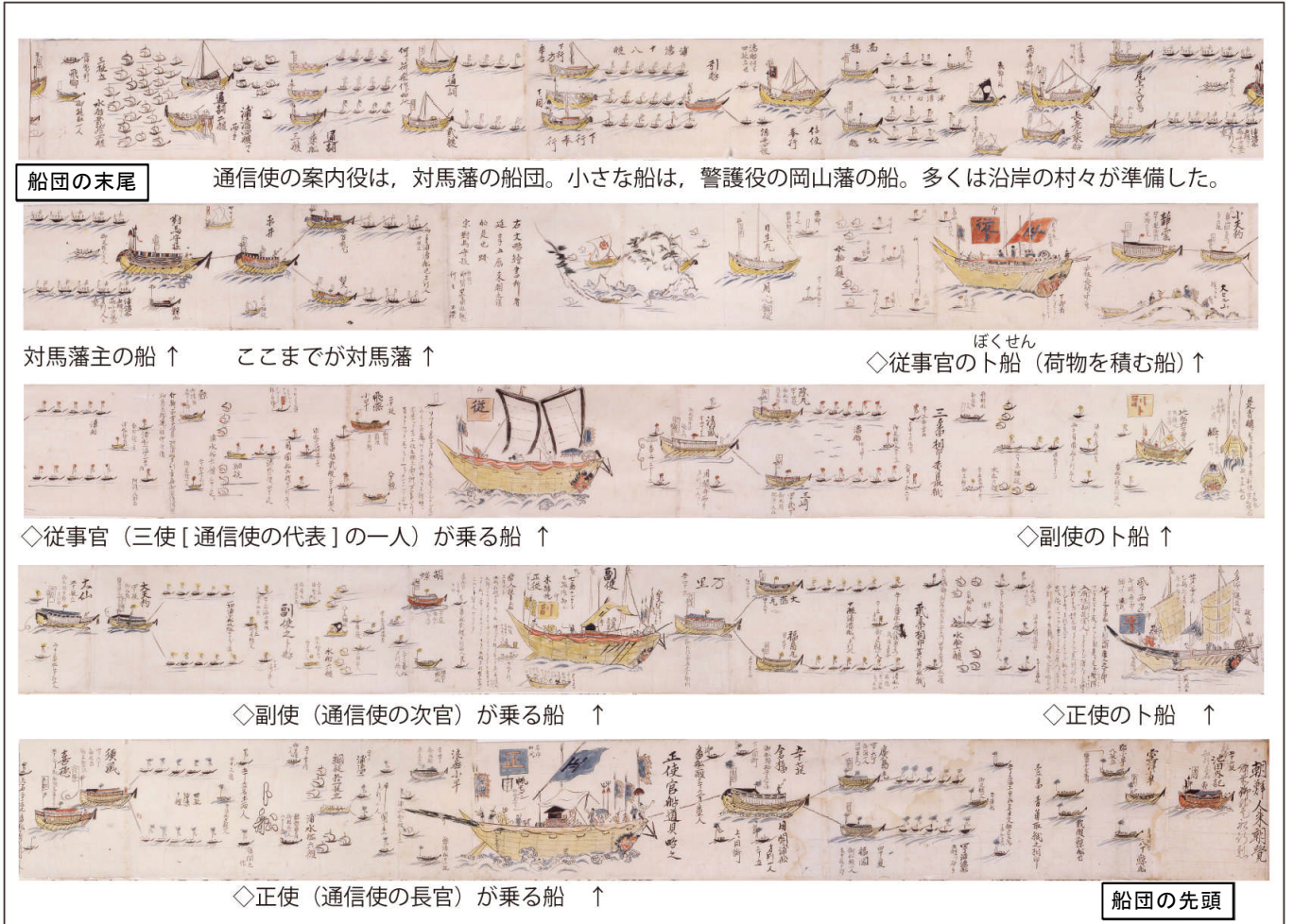


8 鎖国下の外交とひろしま ～朝鮮通信使～

ちょうせんつうしんし



1 朝鮮通信使とはどのようなものだったのでしょうか？



朝鮮人來朝覚備前御馳走船行烈図(部分)(松濤園 御馳走一番館蔵)
 □上の絵は、瀬戸内海を航行した朝鮮通信使の岡山沿岸での様子を描いたものです。

朝鮮通信使は朝鮮王朝が室町時代から江戸時代にかけて日本に派遣した外交使節団です。通信とは「信(よしみ)」を「通(かよ)」わす(友好を深める)という意味で、通信使には外交課題を解決する役目がありました。

江戸時代になると、家康は幕府の支配の安定と權威を高めることを目的に朝鮮通信使の再開を望んだため、1607(慶長12)年から再び朝鮮通信使が派遣されるようになりました。

江戸時代の朝鮮通信使は、徳川家の将

年	目的
1607	日朝国交回復, 朝鮮出兵の捕虜返還
1617	国内平定祝賀・捕虜返還
1624	家光の将軍就任祝賀, 捕虜返還
1636	泰平(世の中の平和)祈願
1643	家綱誕生祝賀, 日光東照宮落成祝賀
1655	家綱の将軍就任祝賀
1682	綱吉の将軍就任祝賀
1711	家宣の将軍就任祝賀
1719	吉宗の将軍就任祝賀
1748	家重の将軍就任祝賀
1764	家治の将軍就任祝賀
1811	家斉の将軍就任祝賀(対馬で対応)

江戸時代に来日した朝鮮通信使

軍就任に際して派遣され、12回を数えました。広島県では、下蒲刈の三之瀬(呉市)や鞆(福山市)に停泊しており、当時の記録から、通信使や接待の様子をうかがうことができます。



江戸時代の朝鮮通信使は、なぜ、下蒲刈の三之瀬や鞆に停泊したのでしょうか？また、その時どのような交流が行われていたのでしょうか？

2 朝鮮通信使はどのような経路を通過していたのでしょうか？

使節は、漢城(現ソウル)から陸路で釜山に向かい、そこから船で対馬・壱岐を経由して下関にやってきました。

下関からは瀬戸内海を通過して大阪の淀川の河口まで進み、淀川を川船で北上して京都に入り、京都からは東海道を陸路で江戸へ向かいました。



朝鮮通信使の航路

3 なぜ、下蒲刈の三之瀬に停泊したのでしょうか。また、その時の様子はどうだったのでしょうか？

下蒲刈の三之瀬は、古くから瀬戸内海航路の重要な港として栄えていました。江戸時代には広島藩唯一の海駅となり、岸に長雁木(階段状の構造物)を備えた船着場が整備されました。

通信使が到着すると、礼砲を撃ち、棧橋では正装した家老や藩士が丁重に出迎えました。棧橋から宿舎までの約50mにオランダ製の赤い羊毛のフェルト(緋毛せん)を約200枚敷き、金屏風100枚や欄干で豪華に飾りました。

暗くなると、多くの提灯のあかりで通路を照らしました。その様子は「燈火が水に輝くのは、あたかも星がきらめくようであった」と言われています。

さらに、通信使一行を驚かせたのは歓迎の料理でした。儀式用として、朝と夕には、七五三の膳、昼には五五三の膳が出され、当時としては最高のもてなしの料理がふるまわれました。また、普段の夕食として、三汁十五菜の膳が出されました。この料理には、きじ・豚・猪・鹿・鶏・鴨の肉類、鯛・すずき・たら・さけ・ひらめ・あわび・するめなどの魚介類、さらに新鮮な野菜など多くの食材が使われました。この素晴らしい



七五三の膳の復元模型の一部
(松濤園 御馳走一番館蔵)
□全部で32あるうちの3つです。



三汁十五菜の膳の復元模型
(松濤園 御馳走一番館蔵)

料理と接待に対して、「安芸蒲刈御馳走一番」と通信使は記録しています。

広島藩は、12回の朝鮮通信使来日のうち、11回の往復路での接待を三之瀬で行うように幕府から指示されました。それに伴い、港の整備や宿舎の改善などを手がけ、豪華な接待をし、あやまちのないように迎えました。また、三之瀬の寺や主な民家は宿舎として使用され、三之瀬の住民はこの間、近隣の村々に移動を強いられました。藩が通信使接待のために動員した人数は、武士・町人・村々の百姓を含め1200人ほど、使用した費用は金で約2万両(米の値段で現在の価値に換算すると約8億円)と言われ、沿岸の村々も多額の出費を求められました。藩にとっても、村にとっても大きな負担となっていました。

4 なぜ、鞆に停泊したのでしょうか？

鞆は、瀬戸内海の航路の中間点に位置し、潮の流れの分岐点にあたる場所です。「潮待ちの港」と言われ、湾内は穏やかで、古くから重要な港でした。江戸時代も港町として栄え、通信使一行の寄港地としても利用されました。

鞆での接待は多くの場合、福山藩の役目(1748年と1764年は他藩が担当)でしたが、他の寄港地同様に鞆にある寺や船問屋などの商人たちも接待に協力を求められました。中でも海のそばの崖の上にあり、通信使三使(正使・副使・従事官)の宿舎として利用された福禅寺から見る景色の美しさについては、代々の通信使の記録に残されています。

1711(正徳元)年の通信使の一人であった李邦彦は、道中で一番の風景であるとして福禅寺からの風景を「日東第一形勝」と評し、筆をとりました。その書は、菅茶山の呼びかけで額に彫られ、福禅寺の対潮楼に掲げられています。



福禅寺(福山市)

□鞆の浦にある寺で、通信使の主だった人たち(通信使三使=正使・副使・従事官)の宿泊所にあてられていました。



日東第一形勝の拓本(広島県立歴史博物館蔵)

□菅茶山(→P38)がつくらせた額から刷ったものです。

5 朝鮮通信使とどのような文化交流があったのでしょうか？

当時の日本の学者や知識人は、儒学や中国の歴史や書物を中心的な学問として学び、それらの知識を基に漢詩を読むことをたしなみとしていました。朝鮮の知識人も同様で、日本の儒学者たちは朝鮮の知識人からより多くを学びとろうと、江戸や京・大阪で、漢文で筆談し漢詩を読みあうといった交流を行いました。通信使は寄港地でも交流を深め、鞆では福山藩や近隣の学者たちが漢文で筆談をしたり、漢詩を読みあったりして交流するのが慣例となっていました。一方、広島藩の三之瀬ではあまり積極的に文化交流をもたなかったようで、福山藩のような交流の形跡はみられません。

しかし、1764(宝暦14)年の通信使では、三之瀬の次に寄港・滞在した忠海(竹原市)で、頼山陽(→P39)の父で竹原出身の頼春水とその弟、春風・杏坪の三兄弟が朝鮮通信使の一行と交流を持ちました。これは、公式なものではなく、

